転入してきた心閉ざした系エスパー女子がオタク文化によって逞しく成長している件について

かんろ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オタク文化がエスパー女子を救うと信じて！

目　次

転入してきた心閉ざした系エスパー女子がオタク文化によって逞しく成長している件について　――――――――――――　1
心閉ざした系エスパーだった私がオタク文化によって逞しく成長した件について　――――――――――――　6

転入してきた心閉ざした系エスパー女子がオタク文化によって逞しく成長している件について

僕にはエスパーの女の子が友達にいる
冗談に聞こえる？まぁ、僕もすぐにそんなことを言われたら冗談だろうと言い切る自信がある
だってエスパーだぜ？つまりちょーのーりょくだぜ？
このご時世そんなありえないことを信じる人がどれほどいるっていうんだ
けれども僕はそんな女の子を転校生として知っているんだ。
最初は皆不思議がって色々なエスパーをしてみてよとお願いしていたんだよ
けどあの子、暗い顔をした状態で何も答えなかったんだよ。
それを見た僕は察したね。
この子、エスパーだから気味が悪いと思われてたくさん転校してきたんだってね。
エスパーがいる学園物ならよくある設定だよ。僕はそういうラノベやアニメをよく見ていたし、そういうゲームも漁ってみたことがある。
これが二次元とかならこの後イケメン主人公が放っておけないとか言いながら関わっていくんだろうけど
僕はその時、全く別の考えをしていたよ。
あの子、絶対人生損しているよね。いや、絶対損していると考えていたよ
だってさ、エスパーだぜ？ちょーのーりょくだぜ？そんなのが使えたら、悪巧みしたい放題、テストの点数稼ぎたい放題、職業も安泰じゃね？
だから損しない人生送って欲しいよなーと考えていたらさ。
その女の子が真っ赤な顔をして僕に近づいて来たんだよ、そして何したと思うう？

いきなり顔面にグーパンだよ？グーパン
いきなりグーパンが当たって顔が痛いのなんの、で何か言おうとしたらさ
その女の子、『私のことも知らないでそんなこと考えないで！」
って言った後教室後にしたよ
いや、知らんがな。僕、君のこと全く知らないし、僕が君について何か考えるのは自由なんじゃないのか？この考え、割と間違ってないよね？
僕は呆然としながら女の子が出た教室を見つめていたよ。
で、次に腹が立ってきた。なぜ、僕が考えていたことにグーパンで対応されなきゃならんのか？そもそも考えてはいかんのか？
交戦だ。あの自分は世界で１番不幸ですー系女の子に徹底交戦しなければならない。そして僕にグーパンしてきたことを謝らせるのだ！
覚悟するがいいさ！グーパンエスパー女子よ！僕にグーパンをさせたことを後悔させてやる！
そんなことで僕とグーパンエスパー女子の戦いが始まったんだ
まず僕は最初にグーパンエスパー女子に『君、人生損してるよ？絶対損してるよ？』という念波を送り続ける日々を始めることにした
もちろん、それだけだとまたグーパンされておしまいだ。だから人生を損している理由を損してる念波を送りながら述べていくことにしたんだ
エスパーだからこそ出来る人生（提供元ライトノベル）
エスパーカッコいい理由１０選（提供元ゲーム）
エスパーが活躍する職業（提供元アニメ）
これらを損している念波を送りながら叩きつけてやったのさ
けどグーパンエスパー女子は強くてね。でかい念波で
『どれもこれも二次元じゃない、馬鹿らしいわ』
とひと蹴りしてきたんだよ。
エスパーも充分二次元じゃろ！僕はそう憤慨しながらアニメやラノベ、ゲームの素晴らしさをグーパンエスパー女子に説いていきなが

らまた損している念波を送る日々を続けていた。
　そんな日々が春から始まり、夏休みに移ろうかとした時。
『そんなに言うのなら貴方が言うアニメやラノベ、ゲームを見せてもらおうじゃない。貴方のその念波にはもううんざりしたし、貴方の家でそれらを見せておしまい。私に関わらないようにしてあげるわ』
　僕の度重なる損してる念波に呆れたのか、僕にゲームやアニメ、ラノベを見せてみろというグーパンエスパー女子からの挑戦状が送られてきた。
　ふっふっふ、僕の念波はようやく功を成したのだ！後は僕が用意する渾身のアニメやゲーム、ラノベを見せて二次元の素晴らしさを教えてやるのだ！
　その時の僕は目的がグーパンエスパー女子を謝らせるより、二次元の素晴らしさを教えることにシフトしていた気がする。
　その時用意していたゲームやラノベ、漫画もエスパー関係というより僕が名作だと思っているものたちばかりだったのだから。
『貴方が用意するゲームやラノベ、漫画なんかで感動なんて絶対しないと思うわ』
　言ったな？グーパンエスパー女子、その考えを変えさせてやる！
　そうして夏休みの時期に始まったグーパンエスパー女子への上映会だけど
　結果として彼女は二次元の素晴らしさを知ることになった
　というより僕は彼女が根を上げるまで上映会をするつまりだったんだけど。
　まさか一作目で号泣するなんてことは予想外であった
　最初は『これが貴方のいう名作？』といった感じで見ていたんだけど、だんだん『これどうなるのかしら？』『え、そうなるの!?』『凄い！凄い！』とだんだん興奮している感じになっていった
　そこからのラストで彼女は号泣、大泣きしながら感動している様子が見てられていた
　僕はその様子を見て大満足しながら悪魔の囁きを送ることとした
『実はこれ、原作がゲームなんだけど、やる？』

彼女が念波と言葉が両方からやるという言葉が送られるまで約1秒
ゲームに夢中になっているお陰で念波を送っても気付かない彼女に
チョロいと思いながら彼女が二次元の素晴らしさを知る瞬間を見つめていた
その後、この夏休みの間で彼女のオタク化は凄まじい勢いで進んでいくことになった
多分やりたいことやしたいことをする前にそんな環境になることはなかったんだろうなーと思いながら彼女のオタク化進行を見つめることになった
そこから念波の内容も損している人生よりも彼女が気に入ったアニメや漫画、ゲームの話が多くなった。
秋頃には僕よりも手を出しているゲームや、アニメ、ラノベが多くなり。
冬頃になると自分でも作りたいものがあると絵描きやプログラミングを始めたという念波があり、僕にシナリオや絵を見せることが多くなった
そして2年目の春頃・・・つまり、現在は
「先生にオタク部の成立をお願い出来て良かったわ。こういう時に心が読めるのは良いものね。自分と趣向が同じ先生を感じ取り、それとなく部活が成立出来る環境を作れたのですから!」
なんということでしょう。心閉ざした系エスパー女子がいつのまにか自身のエスパーを有効利用して自分の欲望を叶える逞しい女子になったではないでしょうか
今では彼女は自分から動いていきながらエスパーすらも自分の欲望の為にガンガン使っていけるようになっている
「それは貴方が教えてくれたことでしょう?貴方のせいで私は欲望真っしぐらのゲス女子になったのですからね?」
露骨に悪い顔しながら僕を煽りおるよ、このエスパー女子。
「褒め言葉として受け止めるわ。さぁ、これから部員集めよ!私のエ

スパーを持って私達と似た趣味の人を速攻で探すわよ！」
分かりましたよ、逞しいエスパー女子さん
じゃ、部員集めを頑張りますか！

心閉ざした系エスパーだった私がオタク文化によって逞しく成長した件について

突然ですが私は超能力者です。
・・・いやまぁ、こんなことを言っていたら何言ってんだこいつ？と思われても仕方がないことかもしれないけど、私は本当に超能力者だよ？
スプーン曲げや透視なんて出来るし、人の心だって読める。人を浮かすことだって出来る。
いろいろな超能力が使える万能超能力者なのです！
そんな超能力者な私ですが、これでも昔は心を閉ざしてた系の超能力者だった時期があります。

だって・・・ねぇ？

机の上に気持ち悪いとか死ねとか書かれてることをみていたり、クラスメイトの皆がひそひそ声で私を気味悪がったり（心読めるから声丸聞こえ）
そんな生活をひたすら繰り返して見てよ？誰だって心折れるし
心閉ざした系の人にならない？
まぁ、今はそんなことなくて逆に超能力を有効活用してるのだけどえ？心閉ざした系の超能力者だった私が超能力を活用しているのならどんな超能力者なのかって？
全員に復讐系？ノンノン、そんなのさらにハブられておしまいじゃない。
実は裏組織に雇われている超能力者？・・・厨二病はそこそこにした方がいいわよ？
なら私はどんな超能力者になったかって？
ふっふっふっ・・・私はオタク趣味に全振りしているオタクエスパーなのです！

ここまでこの高校に私のエスパーを浸透させるのは苦労したのよ？

心を読む能力で困っている人を解決しながら私という存在を皆に認めさせ、気持ち悪いという輩には徹底抗戦してだまらさせ、先生には私という存在がいかに便利なのかをアピールしまくったのよ？

え？どう聞いても心閉ざした系の超能力者だったように見えない？ただの変人超能力者？

・・・そうよねぇ、私自身も信じられないもの。私を見てくれる人はいない、私は世界から認められてないってずっっっと殻にこもっていたあの時の私から考えられると。

ならどうしてそこまで変われたか、それは・・・

めちゃくちゃ失礼な男の子がきっかけで私は変わっていったのです。

今では感謝してるんだけどね、その失礼な男の子のおかげで私はここまで変わることができたんだから・・・

あれは一年前、私がこの高校に転校してたころだったわ。

超能力者のせいで転勤を繰り返して、気持ち悪いと言われて避けられていた私はクラスの人達に何を言われてもひたすら耳を貸さなかった。

『ねぇ、超能力見せてよー』　　『スプーン曲げできるって本当か!?』　　『けど超能力で転勤してきたんでしょー？もしかしたら悪い噂とかあるんじゃない？』　　『ふん！超能力なんてそんな非科学的もの私は信じない！どうせ口だけの何かだろう』

「(なんとでもいえばいい。私は貴方達に関わらない。関わったら私は不幸になる)」

当時はそんなことを思いながら暗い顔をしていたわ。そしたらね・・・

『人生損してるなー、いや絶対人生損してるよ』

なんていう声が響いてきたのよ？

はっ？と思いながら周りを見渡すとね、眼鏡をかけた男の子から聞こえたのよ

その男の子から響く声は止まらなくて
『超能力だぜ?それがあればテスト見放題じゃん、悪巧みし放題じゃん、だから損のない人生を送ってほしいなー』
なんて響いてきたの、それを聞いた瞬間。私の怒りはすぐにでてきたわ
私の悲しみをしらないで、私の苦しみをしらないで、そんなことを考えるなんて・・・!
そう思ったらいつの間にかその男の子にグーパンしていたわ。
けどそのグーパンした男の子、困惑しながら『え?わたくし貴方に何かしましたか?』なんて顔をするものだから、腹が立って仕方がなくって
関わらないって決めたのについ
『私のことも知らないでそんなこと考えないで!』っていったの
その男の子とこれ以上顔も合わせたくなかった私は教室の外に飛び出したわ
その日?家で一日中泣いたわよ、私の深淵に土足で入り込んだのよ?可哀想だと思わない?
けど、その男の子とはそれで終わらなかった。
むしろここから私とその男の子の因縁が始まったわ
一日中泣いて、学校に来た次の日にその男の子から
『おい!グーパンエスパー女子!!お前は人生を損している!!』
そんな言葉、というか念波が響いてきたの。
そしたらその男の子があるアニメではこんな職業があった、あるゲームでは、こんなカッコいい理由があった。ある小説ではこんな人生があったって、私に人生を損している理由を言い出したのよ。
正直、うざいことこの上なかったわ。しかもどれもこれも前にゲームだとアニメだと小説だととついていたから現実感全くなかったし。
どれもこれも二次元だからバカらしいわってその時返したいたわ。
・・・タイムマシンがあったらその時の私をボコボコにしたいわ。
ゲームやアニメ、小説を馬鹿にするなんて絶許案件。
まぁ、その男の子もエスパーも充分二次元だろと憤慨していたのだ

けど
　けどその男の子めちゃくちゃタフだったのよ、こうやって冷たく返したのに諦めずにゲームやアニメ、小説を引用しながら私に人生損してる念波を送り続けたの。
　その念派を送り続けたのは夏休み近くなっても続けていてね。いい加減に終わらせたかった私はその男の子に提案をしたの。

　貴方がいうゲームやアニメを見せなさいってね。
　男の子はその提案をした瞬間大喜びしていたわ。私にゲームやアニメの素晴らしさを教えることができる瞬間が来たって、私を絶対に喜ばせてやるってね
　無駄なことだと思ったわ、私はずっと苦しんできた、悲しんできた。だから喜ぶこと、感動することなんてないってね。
　結果？・・・今のオタクエスパーっぷりの私を見れば一目瞭然じゃない。
　堕ちたわ、男の子が紹介した最初のアニメですぐに堕ちたわ。
　最初は興味なさげに見てたけど、途中から興奮し始めて最後には号泣したわ
　そうしたらその男の子がその私を沼に落とす一言を言ったのよ。
『これ、原作がゲームなんだけど・・・やる？』ってね。
　すぐにやりたいっていったわ、男の子が用意したらすぐに夢中でプレイしたわ
　そのゲームも面白くて、感動して。すぐに次のゲームやアニメ、小説を見たいってせがんでいたの。
　あれ？今思い出すと、あの時私に対してちょろいっていっていたような・・・
　まぁいいわ。そこから私は男の子にせがんで色んなアニメやゲーム、小説とかのオタク文化を見始めたわ。
　やりたいことが出来るというか、心を閉ざしていて何も見なかった私はオタク文化はとても魅力的で、のめり込んでいった。
　私と彼の念派会話は損をしているという話からどんなゲームを見

た、どんなアニメや小説を見たという会話になり。
時間が過ぎて秋の頃には私の方が幅広く手を出すようになって。
冬になった頃には自分で作りたいと思って我慢しきれなくなり、プログラミングや絵描きを始めたわ。
「そして、春。このオタク部の成立にいたるわけなのよ」
「ぶちょーながっ!?オタク部成立までのスピーチながっ!?しかもスピーチなのに最初が重すぎる!!もっと気楽にしてきださいよ、ぶちょー!」
「そうは言ってもね、副部長。貴方と私の関係を語るにはこれくらいあったほうがいいと思うのよ」
「しかも俺とぶちょーの関係の話だった!?・・・それ、部員が集まってぶちょーがどうして転身したのかを聞いてから話しましょうよ～。とりあえずスピーチ原稿はやり直しですよ」
「あら残念。だったら副部長、部長命令です。私と一緒にスピーチ原稿を作成しなさい」
「はいはい、わかりましたよぶちょー」
そんな感じで私が部長、男の子が副部長としてオタク部をすることを目指している。
きっかけは最悪だったけど、副部長の意地が私をここまで変えてくれた。そこにはもう感謝しなかない。
私はもう苦しんでも悲しんでもそれがずっと続くことはない。だって素晴らしい物を私は知っているのだから
「あ、そだ。ぶちょー、やり直す前の原稿。どうせですしタイトル付けときましょ、タイトル。印象深い方が見つけやすいでしょ」
「タイトル、タイトルねぇ・・・だったらこれとかどう?

『心閉ざした系エスパーだった私がオタク文化によって逞しく成長した件について』